

趣旨説明

竹村 牧男

初めに、本シンポジウムの「趣旨」は、次のようである。「欧米の主要な国から、開国要求等をつきつけられ、急速な近代化への道を余儀なくされた明治期以降の東アジアにおいて、西洋哲学はどのように受容され、消化されたのか。その営みは、東アジアのその後の近代化に対し、どのような影響を与えたのか。今後の東アジアにおいて、西洋哲学と東アジア古来の伝統思想との融合もしくは相克のゆくえは、どのようにあるべきなのか。さらに、貧困や南北問題、地域紛争の問題、環境問題等々、現在の地球社会のさまざまな問題を解決し、未来の公正で豊かな地球社会の構築に寄与する哲学は、近代東アジアの哲学史をふまえたとき、どのように創造されるのか。」すなわち、東洋思想と西洋哲学の比較、および日本・韓国・中国の歩みの比較という二重の比較を通じて、東アジアにおける思想運動を検証し直すことをふまえて、今後のグローバル化社会のあ

るべき発展に貢献しうる哲学・思想の構築はどのように可能かを展望しようとしたものであった。

本シンポジウムの構成は、下記のようなものである。

- 1 基調講演 「近代東アジアにおける西洋哲学の受容と展開」
中島隆博（東京大学）
- 2 発表① 「近代日本における西洋哲学の受容と展開」
井上克人（関西大学）
- 3 発表② 「近代中国における西洋哲学の受容と展開」
王青（中国社会科学院）
- 4 発表③ 「近代韓国における西洋哲学の受容と展開」
金鍾旭（東国大学校）
- 5 討論

最初の基調講演において、中島隆博は比較思想の営みを「普遍化の過程」において捉えようとし、この普遍化は「つねに

transposition transformation translation という運動に関わることになる。普遍化可能であることがどうしても垂直的な力線を必要とするのに対して、普遍化は *trans*・という横断的なそれに関わるのだ」と述べ、その近代東アジアにおける横断的な思想運動に関し、「キリスト教」の受容と展開というテーマを設定して考察した。その際、中国の例として、文化キリスト教の可能性を追求した劉小楓、新道徳としての有効性を説いた胡適、日本の例としては、文明の枠組みとして受け入れようとした福沢諭吉、陽明学を通して受けとめた井上哲次郎、また山路愛山、内村鑑三、新渡戸稲造らのキリスト者、聖書研究による普遍性の追求と平民主義を重視した内村鑑三や石崎東国、朝鮮の例としては、民衆の中に地上的な普遍を見出そうとするシアル（種子Ⅱ民衆）思想を説いた咸錫憲、近現代韓国における民族と国家の問題を考察した朴鐘鴻を取り上げ、それぞれにおける普遍と特殊の葛藤や両者の統合のあり方を説明した。

まとめにおいて中島は、「具体的な事例や歴史さらには地域性を明らかにし、その底をうがちながら、（超越的・絶対的な）普遍（による支配・統一）を考えるのは別の仕方、地上的な普遍を考える方向もある。比較し得ないものを比較することで、かえって別の普遍に開こうというのである。……それを本論では、中国、日本、韓国を手がかりに示そうとしてみた」と

述べた。その試みは、比較思想の新たな可能性を問うものといえよう。

次に井上克人は、日本の近代の動向に関して、明治初期、明治一〇年代、明治二〇年代、明治三〇年代以降という分類でその特徴を描いた。明治初期は、個人の独立と国家の独立が不可分に問題となった時代であり、西周、福沢諭吉、中江兆民らの思想を見ることが出来る。明治一〇年代は、ドイツ観念論の受容準備期にあたり、J・S・ミルの功利主義、A・コントの実証主義、H・スペンサーの社会進化論等が研究された。その後、フェノロサにより、東大でヘーゲル哲学が講じられ、井上哲次郎、井上円了らに大きな影響を与えた。明治二〇年代には、T・H・グリーン倫理説が、儒教の文脈において受け入れられ、流行した。また、当時のドイツ観念論の受容には、東大教授の原坦山の存在も大きい。両井上らはドイツ観念論を原坦山が講義した『大乘起信論』を基に、「現象即實在論」において理解したからである。清沢満之の独自の「現象即實在論」的立場の構築も見られる。なお、二〇年代には、元良勇次、大西祝らにより、心理学的研究が盛んとなった。

明治三〇年代以降は、ドイツ哲学への批判的見方も出てくる。特に大西祝は「西洋主義と云ひ日本主義と云ひ急進と云ひ保守と云ひ皆只だ事の一方を見たるものにして思想界に於ては都べて此等の上に立ち此等統合する所の主義なくんばあらず」とし、批評主義を唱えた。それはその後の哲学の受容に大きな

影響を与えたという。

次に王青は、中国近代の哲学受容に関して、論文の最初と最後に要領よくまとめているので参照されたい。その初期に関して、特に厳復、康有為、梁啓超らの活躍について解説し、また章炳麟について、仏教と老荘の思想にもとづいて西欧思想に對峙し、徹底した帝国主義・植民地主義批判を展開したと指摘されていることを紹介した。また、蔡元培や「新儒家思想史」を書いた胡適の業績にふれ、特に新儒家の代表的な思想家である熊十力は、ある民族が存続するためには、自己の哲学と文化を持つことが不可欠であると考え、仏教特に唯識学と融合させて、思弁的で緻密な中国化した哲学を創造したとした。熊十力の弟子の牟宗三も重要な役割を果たし、その他、新儒家の中で新中国において活躍した哲学者として、梁漱溟と馮友蘭を挙げて説明した。

マルクス主義に傾倒した思想家に、陳独秀、李大釗や毛沢東らがいる。中国近代では、帝国主義侵略に対する反発として民族ナショナリズムの台頭が見られ、また西洋的科學至上主義などの境界の露呈に伴い、儒家思想など中国伝統文化の価値を現代に蘇らせる思潮が現れた。その後、ロシア革命をきっかけに中国に輸入されたマルクス主義が、中国革命の過程において発展し、ついに毛沢東思想としてその中国化を果たしたのであった。

次に金鍾旭は、韓国における近代の思想動向を、要約して次

の六期に分類する視点を示した。第一は「伝来の時期」(一八七〇—一九四五)であり、この時期に西洋哲学は、韓国人自らの自主的な研究と、欧米への留学を通じた直接的な紹介、そして日本の大学制度を通じた紹介と伝播など、三つの方式で伝来した。したがってこの時期を、①儒学の視線での初対面(一八七〇—一九一二)、②西欧留学を通じた直接の受容(一九一三—一九二九)、③日本による哲学教育と制度樹立(一九三〇—一九四五)に分ける。第二は「整備の時期」(一九四六—一九五九)であり、朝鮮戦争以後に、海外留学した学者が続々と帰国し、韓国の西洋哲学は再整備の時期を迎える。第三は「復興の時期」(一九六〇—一九六九)であり、各大学での世代交代と複数の学会の出現により西洋哲学の研究が活性化した。第四は「試練の時期」(一九七〇—一九七九)であり、政治独裁が加速化しながら、西洋哲学は国民倫理に変質されるなどの逸脱を経た。第五は「多元化の時期」(一九八〇—一九八九)であり、分野別の研究者の膨張により哲学的な関心も多様となり、多くの学会が誕生した。第六は「分散の時期」(一九九〇—現在)であり、世紀末の脱近代性の議論などを通して、多元化がむしろ障壁化を招来することにより、個別分野の研究は深化したが巨大な議論には顔をそむける現象が現れた。各時期の代表的哲学者として、第一期①の李定稷、李寅梓らから始まって、②の金重世ら、③の朴鍾鴻と高亨坤ら等々、多くの哲学者を紹介したが、あまりにも多いので他は本誌所収の論文にゆだねたい。

金鍾旭は、韓国における近代思想史を総括して、①韓国における西洋哲学は主體的に始まったが、自律的であることはできなかった。②その哲学において多様性はあるが、獨創性が不足している。③その展開が個別深化的であるが、普遍拡大的ではなかった、の三点を挙げ、さらに「韓国における西洋哲学は、個別的に相当、深化したが、超学問的かつ学際的な協同研究を必要とする全地球的な問題に対して、力を失っている。本来普遍性を追求する哲学が、学際性を通して、総体性を要する巨大な議論に積極的に参加してこそ、今日の韓国における哲学の危機を克服する端緒を見出せる」と、自国の哲学の状況について厳しく指摘したが、このことはどの国の哲学界の状況にも向けられてよい反省点であろう。

基調講演および各発表の後、討論の時間が持たれた。そこでは、現代のグローバル化した状況を、地域の伝統に根ざしながらどう考えていくのか、という問題提起が少なからずなされたが、そのことの考察のためにも、まずは近代の歩みを見直してみようというのが今回のシンポジウムの趣旨であり、その意味では、東アジア三国におけるそれぞれの近代哲学界の歩みを改めて確認できたことは有意義なことであったと考える。特に韓国における事情が相当詳しく紹介されたことは、きわめて有益であった。

全体として、西洋哲学の受容は、まず初めにあつては、伝統思想を基盤とせざるをえず、その場合、形而上学的世界も有し

ている仏教や朱子学等が有効であったようである。金鍾旭が説くように、今後、哲学の本来の目的と能力を発揮するためにも、グローバルな視野での課題に対する普遍的な解決の地平を、学問の横断と地域の横断を模索する中で積極的に追求すべきであろう。このことが、今日の比較思想の課題でもあることが浮かび上がったシンポジウムであった。

なお、今学会のシンポジウムは、東洋大学国際哲学研究センターの共催により海外の研究者を迎えることができ、本学会史上、初めての国際シンポジウムとなった。

(たけむら・まきお、仏教学・宗教学、東洋大学学長)